

これからの時代を「国際人」として生きていくために

07L010 金田彩夏

私たちは、「国際人」と聞いてどのような人をイメージするであろうか。今日の日本では、「国際化」、「世界基準」、「グローバリゼーション」など数多くの「世界」を意識した言葉が飛び交っている。敬和学園大学で学ぶ私たちもちろん、世界に向けて視野を開き、世界の人々の心を理解し、世界の人々との交流ができるよう異文化や外国語を幅広く学んでいる。

しかしその一方で、最近の日本の若者は、米中韓の若者に比較すると、「社会と積極的に関わりたい」という人や海外への留学希望者の割合が低いという調査結果がある（『新潟日報』2010年7月13日）。若者の「内向き志向」の問題が至る所で表面化しているようだ。これは果たしてなぜなのか。

私は、その理由の一つとして、「言語」の壁が存在するからではないかと考えていた。私たちの年代の学生は、中学生から教科としての「英語」を学習する。しかしながら、ほとんどの学生は、実際に英語を使いこなすレベルまで達することは非常に難しいと感じざるを得ない。そのため、試験のためには英語を必死に勉強しても、海外の人たちと英語で話すとなると、しり込みをしてしまう人が多いのではないかと。私たちの英語の学習過程の素地において、定期試験や受験があり、そのためだけに勉強している感覚を持ち、いつからか私たちが英語を学ぶ理由が不明瞭になってしまっていることも事実である。

このような状況で、国際的な活躍を目指せ、国際人になれとは何とも無理な話である。しかし、若者が海外に目を向けない原因は本当に「言語」の問題だけなのだろうか。そのことを考えていたとき、私の目を見開かせてくれる見解に出会った。藤原（2005）は、『国家の品格』においてこう述べている。

内容がないのに英語だけは上手いという人間は、日本のイメージを傷つけ、深い内容を持ちながら英語は話せないという大勢の日本人を無邪気ながら冒瀆しているのです。（中略）とにかく国語です。一生懸命本を読ませ、日本の歴史や伝統文化を教え込む。活字文化を復活させ、読書文化を復活させる。これにより内容を作る。遠回りでも、これが国際人をつくるための最もよい方法です。（藤原、p42）

「国際人」というとすぐに「英語」となるのだが、藤原の言う国際人とは、英語と国際人に直接の関係はなく、世界に出て、人間としての生き方、考え方に敬意を表されるような人のことである。私の場合、少なくとも海外に目を向けるように意識してきたつもりだが、日本の文化や精神を大切にすることを怠ってきたように思えてならない。それゆえに、藤原の言葉にはっとさせられたのである。

今年度受講した「異文化コミュニケーション論」は、明治期に留学した日本の知識人の様々な生き方に焦点を当てた。彼らに共通することは、歴史や伝統文化に根づいた日本人としての精神文化を土台にして外来の思想に向き合ったところにある。私は彼らの生き方を学びながら、自分の生き方を見つめ直していた。「異文化コミュニケーション論」の受講をきっかけに変化していった私の心の過程を考察してみたい。

講義では、平川（1985）による「山にあるものは山を見ず」という中国の賢者の言葉が紹介された。これはまさに過去の私のあり様であったことに気づいた。「日本なんか…。日本にいたって…。」今思い返して

みれば、これが私の口癖だった。「日本にいたら自分は駄目になってしまう、日本は私の住むところではない。一刻も早く海外に出て、自分の道を探さなくては！」何の根拠もないのだが、私はそのような思いに取りつかれていた。

この思いは日本にいただけでは起こらなかっただろう。私は高校時代、一年間、アメリカに留学した経験がある。「郷に入れば郷に従え」をモットーにしていた私は、現地の人たちをまねようと必死だった。今までの自分ではなく、自分を変え、新たな別の自分として生きていこうとしていた。自然と私は彼らの文化の中へ引き込まれていた。

一年の留学を終え帰国した際に周りの人たちに言われたことは「すっかりアメリカナイズした」という言葉だった。事実アメリカかぶれの状態にあった私が考えていたことといえば、「アメリカはよかった、アメリカではこうだったのに日本では…」というまさに反日本的な考えばかりだったと記憶している。

アメリカではカルチャーショックに苦しむことのなかった私は、帰国後、逆カルチャーショックに苦しむ羽目に陥った。冷静に振り返れば、アメリカにいたころは日本を恋しいと思う気持ちでいっぱいだった。きっと私の心の中で、遠くにあった日本という国を美化していたのだろう。帰国後、その思いに反する出来事に次々と遭遇する中で、私は動揺してしまっていたに違いない。

別の世界を知った私は、それからというもの、まさに平川の言う「山にあるものは山を見ず」の状態が続いた。いつかまた海外に行きたいというあこがれだけが強くなってしまい、日本について学ぶことを止めてしまったように思える。平川が述べる次の箇所は私をさらに自省に導いた。

異郷に暮らす時は、他のいかなる環境にもまして、僕らは自分自身の中へ追い込まれる。逆説的に響くかもしれないが、ぼくらは自分自身についてよりよく知るために外の世界へ出ていくのである。(中略) 人間は自分の国の外へ出ると、単なる一個人以上のものとなる。彼は自分自身の中に自分の国と自分の人種を担うことになるからだ。彼の言動は彼個人の言動として評価されるだけでなく、彼の国や彼の人種の言動として評価されることになるからだ。(中略) 周囲はその人を通して彼の国を知る。そしてこのように高い責任感ほど人間をしっかりさせるものはない。(平川、p.213)

これはまさに私自身が無意識のうちに感じていたことであり、非常に共感できるメッセージである。海外で何度も自分が日本人であることを意識せざるを得ないということを経験してきたにも関わらず、私は日本にいる自分が「日本人」であることを忘れてしまっていた。あるいは、日本人であることを意識しなくてもすむ環境に浸っていた。日本の文化には目もくれず、「世界に目を向ける。海外に行こう。」などと考えていたことはとても恥ずかしいことであると気づかされた。

渡部(1995)は、国際化とは、モノ、カネ、ヒト、情報のボーダーレス化であると述べている。つまり、これらの四つが世界に広がれば広がるほど、私たち一人一人が発信者として責任を持たなければならない。それと同時に、日本にも海外から多くのものが入ってくる。それらと上手く向きあい、自分の中に取り入れていく必要がある。両方が作用して、お互いに有益な関係がつかれるのだと思う。今の私は海外に出て、日本人としての責任を果たせるのだろうか。今までは、ただ漠然とそのつもりになっていただけの話である。そのような高慢はこれからは取り払わなくてはと思う。

ここで新渡戸稲造の『武士道』に触れる。この著は、今から100年余り前、新渡戸がヨーロッパ留学時に英語によって書かれた。その「序文」にあるように、本書が書かれたのは、ベルギーの法学者から、学校教育に宗教がない国でどうやって子孫に道徳教育を伝えていくのか、という問いを受けたことがきっかけであった。日本が世界において未知なる国であった時代に、新渡戸は日本にもヨーロッパに匹敵する誇り高

い道德体系があることを海外に知らしめたのである。その著は世界の人々に共感を広げたという。

私に足りていなかったのはそのような精神である。私たちが日本のことに無関心であると聞けば、海外の人はきっと残念な思いをすするだろう。私が海外の人と関わる時も同様のことを期待する。私はその国を愛してやまない人の近くで多くの事を学びたいと考えるだろう。

日本にいて日本に向き合おうとしていなかった私は、自分の足元から世界をみることを忘れてしまっていた。足元に不満ばかりを持ち、海外に目を向けることばかりに気をとられていた自分は、まるで土台のない家に立ちすくんでいるようなものなのだと気づいた。私のアイデンティティーはいつでもどんな時でもどこにいても変わることはない「日本人」なのだ。

しかし、もしかしたら私のような経験があってもよいのではないか、と思うこともある。私は海外に目を向けたからこそ、日本のネガティブな点に気づいた。そして、その後の葛藤を味わうことで日本を思うことの意義を知った。大切なことは、ただ日本がダメな国だと決め込むのではなく、違いを違いとして受け入れ、認めることができるかであろう。日本について学び、よい面と悪い面をともに見つめ直すことは、自分と他者の本質を理解することにもつながっていく。私はこれから海外での生活に向けて準備を始めるのだが、日本人として、自分の国のことを存分に学びたいと思う。そして海外で様々な文化や様々な人たちと出会い、日本という国、そして自分自身と向き合っていきたいと思う。

参考文献

『新潟日報』「海外留学減る」2010年7月13日。

藤原正彦 『国家の品格』新潮社、2005年。

平川祐弘 『西欧の衝撃と日本』講談社、1985年。

新渡戸 稲造 『武士道』（佐藤全弘訳）教文館、2000年。

渡部 淳 『国際感覚ってなんだろう』岩波書店、1995年。

(担当教員 中村義実)